

雑感



有明地域開発局長

伴 正 善

有明臨海工業地帯は、熊本県が九州における中央工業地帯の拠点地域として、有明海に面し二市四町（荒尾市、玉名市長洲町、岱明町、横島町、天水町）と、その背後地域（南関町、三加和町、菊水町、玉東町）からなり、内陸部は、玉名平野を中心とした田園地帯から次第に高い丘陵地となっており、九州でも比較的温暖な地域で、地形的に恵まれた立地条件に加え、九州の主要都市へ通じる地理的優位性を有しているため、県では昭和三十八年から埋立工事に着手し、臨海部に二百八十五万平方メートルの埋立用地を造成し、アルミ加工工業、大型造船工業を中心に、関連企業や、機械金属工業など、高度加工工業が進出しています。その背後圏にも組織化された鉄工団地や、その他の諸産業が立地し、既存工業の発展と共に、地域の開発の大きな原動力となっています。

又、特に昭和四十九年に完成した名石浜用地には、約百六十五万平方メートルのうち、約五十七万四千平方メートルに、すでに諸企業が進出し、約十六万七千平方メートルは道路、緑地帯として整備されており、残りの約四十二万四千平方メートルについても、付加価値の高い企業誘致を積極的に進めているところであります。

他方、熊本港については、物資流通の拠点である熊本市圏に、低コスト、大量輸送の海運の窓口として、対中国、東南アジア貿易の窓口として、本県の経済、ひいては九州の中心流通拠点としての発展に寄与することをねらいとして、昭和四十九年四月重要港に指定され、各種の調査および、関係九漁業協同組合と話し合いを進めてきました。熊本港の全体計画は一応計画として、現在の経済状況と国際状況をふまえると同時に、沿岸

漁業の振興のための諸施策を講じつつ進めることとして、昭和五十四年二月関係九漁協と、一部着工（陸岸からの六百五十メートルの橋梁と、マイナス三メートル、長さ二百メートルの岸壁）について同意をみて、昭和五十四年三月から工事を進め、橋梁の橋脚の基礎部分の鋼管の杭打だけ四脚を打設し終わり、ただ今「のり」の期間中であるため九月より昭和五十五年三月までは、工事を中止し、引き続き、漁業補償及び漁業振興等を進めている現状であります。

以上いづれも、高度経済成長時代に、華やかに発足した開発事業であり、低経済成長時代になれば、そのテンポにあわせて進められていく事は当然であります。長洲の臨海地帯は、造船工業もドンドン底を過ぎ、上向きに引きかけ、十一月では七七多操業率となり、一応、愁眉をひらいているところで、これに伴う関連企業も、徐々に平常の状態になってくるものと思われまふ。名石浜工業用地の残地も、製造業等の進出は、なかなか難しい時代となっておりますが、本県も、今後エネルギーには、公害アレルギーで拒否するだけでなく、充分検討して、エネルギーの確保等に活用する方向に、そろそろ進むべきではないかと考えられる現況であります。

他方、熊本港の整備についても、港湾

が国民経済のみならず、国際経済の変動をもっとも受けやすいものであり、現在の日本経済の状態では、徐々に公共投資を行い、その間、沿岸漁業の振興も図りつつ、残存海域の漁業振興には漁業者と共に振興策を図り、整備していく方向で進めていきたいと考えています。

とにかく、文明も爛熟期をむかえ、教育、経済、新製品開発、人口、食糧、エネルギー、行政など、どの道においても予期しなかった難問をかかえこんでしまっている今日は、窓ガラスにぶちあたって遮二無二もがいているハエのようなものではないか、生まじめな「ハエ」は、窓ガラスをみようともしない。まじめな「ハエ」は頑張りさえすれば、ガラスを通過できるとしか思っていない。では、どうするか、透明なガラスと空気のちがいを見極め、押してだめなら引いてみな、の態度で一歩退く、そうすれば、本当に開いているガラス窓のすき間が発見でき、そこから外へ出られる。

今こそ現代の行きつまりを何とか超えられないかと、冷静な頭脳をもって事に処する姿勢を必要とし、その姿勢の中から、文化の時代として豊かな人間性と、ゆとりと活力のある、地方の時代にふさわしい姿で事業を進めていきたいと思っている昨今です。

熊本のあそび・ちびっ子県大会



竹馬、まりつき、ナワ跳びなど古くから伝わる遊びを子供たちに親しんでもらおうと第四回熊本のあそび・ちびっ子県大会が、10月28日、熊本市の自衛隊健軍駐とん地で開かれた。大会には県下76保育園から園児、父母ら1万人が参加した。

付き添った親たちにとっても昔懐かしいものばかり。現代っ子たちも素朴な昔ながらの遊びに楽しいひとときを過ごしていた。